



Title	日本語の概数表現における語用論的機能の考察
Author(s)	張, 琴琴
Citation	言語科学研究, 3, 63-76
Issue Date	2026-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99128
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99128
Type	journal article
File Information	03_07.pdf



日本語の概数表現における語用論的機能の考察

張 琴琴

1. はじめに

本稿は、Brown & Levinson (1987)¹ のポライトネス理論や Grice (1989) の質の格率などを援用し、日本語における概数表現の機能を明らかにすることを目的とする。宇都宮 (1995) は、「数人」「大体」「いくつか」など、おおよその数量を表すものを「概数」と定義している。しかしながら、日本語にはこれらに加え、「大体 500 頭」や「おおよそ 60 個ぐらい」など、より具体的な数を含んだ表現も見受けられる。このような表現を踏まえ、日本語の数量詞を包括的に再分類したものに張 (2024) がある。張 (2024) は、形態的および意味的観点から、日本語の数量詞を特定数量詞、不特定数量詞、準特定数量詞の 3 つのカテゴリーに分類している。さらに、準特定数量詞の下位分類として、〔副詞 + 数量詞〕型、〔「数」 + 助数詞〕型、〔数量詞 + 副助詞〕型、〔数量詞 + 名詞〕型、〔副詞 + 数量詞 + 副助詞・名詞〕型、〔数詞的疑問詞 + 「か」〕型、〔概数数量詞〕型の 7 つのタイプを提案している。本稿は、張 (2024) の分類にしたがい、概数表現を上述の 7 種類に分類し、概数表現を「数量に一定の幅を持たせることによって、発話内容の解釈を柔軟にする言語表現である」と定義する。本稿は、「大体 30 個」「約 15 人」「300 円ぐらい (くらい)」「大体 50 冊ぐらい (くらい)」といった表現を主な考察対象とする。実際の言語使用においては、これらの要素がひとまとまりとなって用いられる場合が多い。そこで本稿では、これらを一体的な概数表現として捉え、その語用論的機能について考察を行う。

なお、本稿における分析は、概数表現の使用を常に話し手の意図的・戦略的選択として想定するものではない。場合によって、話し手は数値に幅が生じ得る状況を事実として提示しているにすぎず、その結果として、聞き手あるいは話し手自身に対する拘束や期待が相対的に緩和されると解釈されうる。本稿では、このような結果として生じる語用論的効果に着目し、必ずしも話し手の主観的意図に還元しない形で議論を進める。

2. 先行研究

従来、概数表現に関する研究としては、森山 (2001)、赤楚 (2005)、田中 (2011)、呉 (2022) などが挙げられる。しかし、これらの研究は主として数量詞の遊離現象や、概数が表す数値の範囲に焦点を当てたものであり、概数表現が果たす機能そのものに関する分析はほとんど行われていない。さらに、多くの先行研究では、本稿で取り扱う概数表現を、数量詞と副詞 (森山 2001、仁田 2002 など)、あるいは取り立て詞 (仁田 1981 など) といったように分類し、それぞれを個別の言語要素として扱ってきた。また、語用論的観点から分析を行った B & L (1987) は概数化する「だいたい」のようなものを「ヘッジ」として取り上げている。実際、ヘッジに関する初期の研究は、Lakoff (1972) の論文に端を発する。Lakoff (1972 : 195) では、Hedges を

¹ 以降 B & L (1987) と略称する。

「... words whose job is to make things fuzzier or less fuzzy」(…物事を曖昧にしたり、あるいは曖昧さを低減させたりする役割を持つ語)²と定義している。B & L (1987) におけるヘッジ概念は、Lakoff (1972) が提示したヘッジの概念を参照しているものの、両者は同一ではない。Lakoff (1972) が主に命題や語句の曖昧化に着目しているのに対し、B & L (1987) では、発話行為全体に関わる語用論的戦略として、より広い範囲でヘッジが捉えられている。

B & L (1987) によれば、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーは15種類、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーは10種類が存在する。B & Lのポライトネス理論では、ヘッジを「発語内効力へのヘッジ」、「小辞にコード化されたヘッジ」、「副詞節によるヘッジ」、「Griceの行動指針に向けられたヘッジ」、「ポジティブ・ストラテジーに向けられたヘッジ」、「韻律的、動作的ヘッジ」という6種類に分類している。本稿で着目するのは、これらのうち、数量表現との関連が明確であり、日本語の概数表現と機能的に対応づけやすい「小辞にコード化されたヘッジ」と「Griceの会話の公理に向けられたヘッジ」である。例えば、「小辞にコード化されたヘッジ」の例として、(1)のツェルタル語の例が挙げられている。

- (1) ya hk'an²ala pešuk.³
 I want $\left\{ \begin{array}{l} \text{sort of a peso's worth.} \\ \text{a peso's worth, more or less.} \end{array} \right.$ (B & L 1987 : 157)

B & L (2011 : 218) によると、-uk、ok-仮定法を表す接尾辞、as it were (いわば)、sort of (～のような) について、話し手は発話の真実性についての責任を否定するためにこれを用い、陳述を「事実に反している」かのようにしたり、明確でないものとしたりすることができる。また、「Griceの会話の公理に向けられたヘッジ」の例として、(2)のタミル語の例が挙げられ、質の「行動指針に対する」ヘッジは、「話し手が自分の発話の真実性について完全な責任は負わないことを示唆するものである」と述べている (B & L 2011 : 228)。

- (2) avaan pattu ruupai-oo ennamoo kuTuttaan.
 He gave *some* ten rupees, *more or less*. (B & L 1987 : 167)

つまり、B & Lによれば、「だいたい」や「ぐらい」といった表現は、話しの焦点をぼかし、断定を回避することによって、FTA (Face Threatening Acts)⁴の度合いを和らげ、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能することができる。本稿では、日本語における概数表現の機能の一端として、ネガティブ・ポライトネスの観点からその役割を考察する。その際、分析の枠組みとしてB & Lのポライトネス理論を援用する。しかし、「約1時間お待ちいただく必要がございます」や「この洋服はだいたい30,000円かったので、今、手元に5,000円ぐらいしか残っていない」といった場合、B & Lの理論に基づくネガティブ・ポライトネスの枠組みだけでは説明が難しい。そこで、本稿では、Griceの質の格率や、加藤 (2009, 2020) などで提

² 日本語訳は筆者による。

³ 例文番号は本稿の通し番号に変更している。なお、本論で出典を明示していない例文は、語用論的効果を明確に示すために作成した作例である。

⁴ 話し手が聞き手のフェイスを脅かす行為 (以降FTAと略称する)。

案された動的語用論の視点を取り入れ、この問題について議論を進める。

3. 概数表現にみるネガティブ・ポライトネス

本章では、B & L が提唱したポライトネス理論、特にネガティブ・ポライトネスの枠組みに基づき、概数表現の機能について検討する。具体的には、日本語の概数表現がネガティブ・ポライトネスとどのように関わるのかを、実際の会話場面において十分に想定可能な発話例を用いて考察する。本章で用いる例文 (3) ~ (12) は、概数表現が用いられる文脈および、それによって生じる語用論の効果を明らかにすることを目的としている。以下、概数表現の用法を4つの場合に分けて考察を進める。

3. 1 行為要求の場合

ポライトネス理論によれば、依頼・命令・警告・指示などは、聞き手のネガティブ・フェイスを脅かす言語行為である。(3) (4) は聞き手に対する命令を示す例文である。

(3) 1時間経ったら、オフィスに来てください。

(4) 大体1時間ぐらい経ったら、オフィスに来てください。

(3) では、話し手は具体的な時間を提示しており、聞き手はその時間（例えば、14時30分であれば15時30分）に行動を起こす必要がある。これは、聞き手に時間的拘束を課すものであり、その自由を制限することからネガティブ・フェイスの侵害に該当する。一方で、(4) のように「大体1時間ぐらい」という概数表現を用いることで、聞き手は例えば50分後や1時間5分後に行動しても問題ないと解釈することができる。これは、時間に関する解釈の幅を聞き手に委ねるものであり、聞き手の自由度を尊重する表現と言える。B & L (2011: 322) によれば、話し手はFTAを行う際に、標的となる対象や侵害の程度を曖昧にすることで、オフ・レコードの戦略を選択する場合がある。すなわち、聞き手のネガティブ・フェイス（妨げられたくない欲求）を侵害しないよう、補償行為として曖昧な表現を用いるということである。この観点から、(4) の「大体1時間ぐらい」は、相手の自由（時間を限定しなくてもよい）を尊重していると考えられる。仮に「1時間」と断定的に述べた場合、聞き手はそれを絶対的な情報として受け取る可能性が高い。したがって、「大体1時間ぐらい」と表現することで、話し手は正確な時間数値の断定を避け、聞き手の動作（相手が時間を数えたりする）を縛らないようになる。話し手が聞き手の行動の自由を確保しようとする補償的配慮、すなわちネガティブ・ポライトネスとして機能していると考えられる。

3. 2 行為予告の場合

B & L (1987: 61) では、face について、‘the public self-image that every member wants to claim for himself’ と定義している⁵。この定義に基づけば、会話に参加する話し手・聞き手の双方が、それぞれのフェイスを有していると理解できる。本節では、話し手が自身の行為について宣言する際に、概数表現を用いることで自らのネガティブ・フェイスを維持・保護しようとする用

⁵ フェイスとは、すべての構成員が自分のために要求したいと願う公的な自己イメージ（田中典子（監訳）2011: 79）。

法について考察する。以下に示す (5) ~ (8) は、すべて話し手が自らの行為を聞き手に対して宣言するものである。

- (5) 今回のイベントは 300 人を集めます。
- (6) 今回のイベントは大体 300 人を集めます。
- (7) 30 分経ったら、オフィスに行きます。
- (8) 大体 1 時間ぐらい経ったら、オフィスに行きます。

(5) および (7) では、「300 人」「30 分」といった明確な数値が用いられており、話し手が自己の行為の達成水準やタイミングについて、具体的かつ確定的に述べていると解釈される。このような具体的表現は、聞き手に対して一定の期待を生じさせると同時に、話し手自身に対する義務的な圧力として作用する可能性がある。そのため、例えば、「300 人を集めます」と明言すれば、聞き手はその数に達することを当然の成果として捉えるかもしれず、達成されなかった場合には責任を問われる可能性も生じる。同様に、「30 分経ったらオフィスに行く」と述べることで、時間的拘束を自らに課すこととなり、30 分より遅れれば不履行と見なされかねない。このような発話は、話し手自身の行動の選択幅を狭め、自由を制限するため、ネガティブ・フェイスの侵害と見なすことができる。これに対し、(6) および (8) では、「大体」「ぐらい」といった概数化の要素が加わることで、数値の解釈に一定の幅が生じている。この幅は、話し手が自己の行為達成に関して厳密な基準を設定していないことを示すものであり、結果として、聞き手による期待や評価の基準を相対化する効果を持つと考えられる。たとえば、「大体 300 人を集めます」という発話は、実際の人数が 280 人や 310 人であった場合にも、発話内容と大きく乖離しているとは解釈されにくい。このような解釈の余地は、話し手が数値達成に関する責任を一義的に負うことを回避し、行為に対する拘束を弱める方向に作用する。したがって、概数表現は、話し手の自由度を維持する語用論的效果を結果的にもたらすと位置づけることができる。

また (8) では、「大体 1 時間ぐらい経ったら」という表現によって、50 分後や 1 時間 10 分後にオフィスへ向かうことが許容され、1 時間を厳密な基準としない自由な行動選択が保障されている。このように、概数表現は数値に対する解釈の幅を生み、話し手に対する拘束を弱め、結果的にネガティブ・フェイスを保護する方向に作用する。

このように、概数表現は話し手自身の自由度を高めることで、ネガティブ・フェイスを脅かすリスクを軽減し、話し手自身のネガティブ・フェイスを守るためのネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能していると言える。また、話し手が聞き手に対して行為を宣言するという行為自体が、聞き手に一定の期待を生じさせる可能性があることを考慮すれば、概数表現はその期待を曖昧化することで、聞き手からの過剰な要求を回避しようとする機能も有している。すなわち、話し手にとっての自由を保持しつつ、聞き手のポライトネス要求にも応答する補償的な手段として、概数表現は機能していると解釈することができる。

3. 3 未来のことに対する予測・推定の場合

先述したように、話し手が自身の行為を聞き手に対して明言する場面、すなわち行為要求や行為予告においては、具体的な数値を曖昧化する概数表現が話し手のネガティブ・フェイスを守るためのネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして明確に機能している。これに対し、本節では、話し手による予測や推定の場面における概数表現のポライトネス的機能を検討するが、(9) (10) を通じて、ネガティブ・ポライトネスの機能が相対的に弱くなる傾向があることを指

摘しておきたい。

- (9) 大体1時間ぐらいで終わると思う。
- (10) 大体1万円で足りると思う。

これらの発話は、話し手が未来の出来事について所要時間や必要経費を推定して述べているものである点で、行為要求や予告とは異なる性質を持つ。ここで述べられている行為は、話し手自身の動作でもなく、聞き手への依頼・命令でもない。むしろ、話し手が状況に関する情報を予測的に説明しているに過ぎない。したがって、これらの発話においては、聞き手のネガティブ・フェイスを直接的に脅かすリスクも低く、また話し手自身の行動に対するネガティブ・フェイスも行為予告ほど明確には問われにくい。

しかしながら、話し手があくまで未来の出来事に関する予測を述べている以上、その予測の正確性に関して一定の責任が伴うと考えられる。例えば、「1時間で終わると思う」と断定的に述べた場合、結果的に1時間を超えた際には、聞き手の期待を裏切ったと受け取られる可能性がある。その点で、話し手は間接的にはあっても、発話の内容に関して責任を負っていると言える。とは言え、B & Lのポライトネス理論では、発話者の責任負担について明示的に論じられているわけではない。

この点については、Grice (1975) の発話の原理、特に質の格率を参照することで補完的に説明できる。質の格率とは、話し手は真であると信じることを述べるべきであるというものであり、「大体1時間ぐらいで終わると思う」といった表現は、「ある程度の根拠に基づいた予測ではあるが、厳密な長さではないかもしれない」といった含意を生じさせる。これにより、話し手は確実性の程度を緩やかに設定し、聞き手に対して過度な期待を抱かせないように配慮している。言い換えれば、概数表現は、話し手が自身の予測の精度に対する責任を相対化・緩和するための戦略であり、結果としてネガティブ・フェイスの保護に寄与している。

また、「大体」「ぐらい」といった表現により、話し手は時間や金額などに関する断定的な言明を回避し、聞き手に対して押し付けがましい印象を与えないようにしている点も注目し得る。これは聞き手に対する暗黙の配慮であり、ネガティブ・ポライトネスの一形態と見なすことができる。ただし、ここでのネガティブ・ポライトネスは、行為要求・予告の場面におけるような、明確で強い社会的拘束力を伴うものではなく、あくまで話し手の発話責任の緩和を目的とする限定的な機能にとどまる。そのため、概数表現はこの種の発話においてもネガティブ・ポライトネスとして機能してはいるものの、その強度は相対的に弱いと考えられる。

3. 4 過去の事実などに対する叙述の場合

未来の出来事に対する予測・推定と比較し、すでに起こった事実や既存の状態について記述する場合、概数表現がネガティブ・ポライトネスとしての機能はほとんど明確にならない。このような用法は、特に (11) (12) のような新聞記事や商品説明書などの情報提供的文脈において顕著であり、情報を分かりやすく伝えることや、厳密な数値を避けつつ大まかな傾向を示すことを目的として、概数表現が頻繁に用いられる。

- (11) 北九州市のテーマパーク「スペースワールド」が27日、約5千匹の魚を氷漬けにしたスケートリンクを閉鎖した。「かわいそう」「気持ちが悪い」などと批判が寄せられていた。魚を取り除き、来月にも通常のリンクとして再開する。

https://www.nikkei.com/article/DGKKASDG27H2K_X21C16A1CC1000/

- (12) 約 1000 台のロボットで溶接し、快適な乗り心地や静粛性を実現する高精度かつ高剛性なボデーをつくります。

https://www.toyota-kyushu.com/process/miyata_plant.html

(11) (12) で使用されている「約 5 千匹」や「約 1000 台」といった表現は、厳密な数量の提示を避けながらも、読者におおよその規模感を伝えるという目的に基づいている。形式的には、これらの概数表現は「4958 匹」や「996 台」などの具体的数値に置き換えることも可能であるが、そのような詳細な数値は、一般的な読者にとって記憶や理解の上で認知的負荷が高くなると予想される。むしろ、適度に抽象化された概数表現のほうが、読者にとって情報処理が容易であり、情報の伝達効率を高める効果があると考えられる。

さらに、書き手にとっても、過度に具体的な数値を提示することは、情報の正確性について詳細な追及を受けるリスクを伴う。そのため、「約」「ほど」といった概数化する要素を用いることで、ある程度の曖昧性を保持し、発話内容に対する責任を緩和しようとする意図が働いていると解釈できる。この点において、話し手は自らのネガティブ・フェイス——すなわち「自分の発言に対する自由を維持したい」という欲求——を守っているとも考えられる。ただし、このような文脈では、聞き手（＝読者）の行動を拘束する意図や、話し手自身の行為への言及がほとんど見られないため、B&L におけるネガティブ・ポライトネスの典型的な用例とは異なる側面がある。つまり、概数表現の使用が、聞き手のネガティブ・フェイスや話し手のそれを積極的に配慮した結果であるとは言い難く、ポライトネス・ストラテジーとしての明示的な機能は相対的に弱い。

この点について、加藤（2022）などは日常会話において「発話の粗略性（looseness）」⁶ がしばしば機能していると指摘しており、多少曖昧な表現であっても、話し手と聞き手の間で共有される前提や文脈により、意味が通じる状況が多いことを示している。日本語の概数表現は、まさにこのような意味の緩やかな共有と、情報の過度な確定を回避するための言語的工夫として考えられる。したがって、過去の事実や状態に関する叙述における概数表現の使用は、聞き手の行動あるいは話し手の行動を縛るものにはならないため、ネガティブ・ポライトネスとして機能しているか否かについては、あまり前景化しにくい。

以上の分析から明らかなように、概数表現が果たす語用論的機能は、単一のポライトネス戦略に還元できるものではない。本稿では主に、概数表現が聞き手あるいは話し手に課される拘束を緩和する点に着目し、ネガティブ・ポライトネスの観点から議論を進めてきた。しかし、その機能の内実を詳しく見ると、概数表現は必ずしも聞き手の自由度を確保する場合に限らず、話し手自身が引き受ける義務や責任を相対化する場合にも用いられていることがわかる。たとえば、要求行為においては、概数表現は聞き手に過度な負担を課さないための配慮として機能する一方、約束や予告といった行為においては、話し手自身に課される将来的な義務を一義的に固定しない効果を結果的にもたらす。この点において、概数表現は、対人的な配慮の対象が聞き手に限定されないという意味で、ネガティブ・ポライトネスの適用範囲を拡張するものと捉えることができる。

また、本章の 3.3、3.4 および以下の 4.1 で扱った事例はいずれも、遂行性や要求性を伴わない

⁶ 粗略性とは、文字通り厳密さ・詳細さを欠く特性のことで、情報を簡潔化すること、また、簡略化した結果の状態を指している（加藤 2022 37）。

陳述性を持つ文における概数表現という点で共通している。これらの表現は、一見するとポライトネスと直接的な関係を持たないように見えるが、誤りの可能性を抑制するという点では、判断の断定性を弱め、対立を回避しようとする態度として、ポジティブ・ポライトネスの戦略と捉えることもできる。また、聞き手に厳密な解釈を要求しないという点では、相手の自由な判断の余地を確保する表現として、ネガティブ・ポライトネス的な側面を併せ持つとも考えられる。

4. 質の格率と概数表現の関わり

Grice (1975)⁷ は、人間同士の円滑なコミュニケーションを成り立たせるためには、「質」「量」「様態」「関連性」という4つの格率を守る必要があるという会話の協調原理を提唱した。Grice (1989: 27) では、質の格率 (The maxim of Quality) について、以下のように説明している。

Under the category of Quality falls a supermaxim — “Try to make your contribution one that is true” — and two more specific maxims:

1. do not say what you believe to be false.
2. do not say that for which you lack adequate evidence.

要するに、会話における自分の発言が誠実であるように努める必要がある。特に、「自分が偽りだと思っていることを口にしない」ということと、「十分な根拠がないことを軽々しく言わない」ということである。すなわち、発話者は自らの発言内容に責任を伴う立場にあると考えられる。しかし、前述のように、B & L のポライトネス理論では、発話の曖昧化による話し手の責任の軽減については言及されていない。そのため、本節では質の格率の知見を援用し、話し手の責任回避という観点から、未知の事情と既知の事情に分けて考察を行う。

4. 1 未知の事情について

本節では便宜的に「未知の事情」という表現を用いるが、ここで問題とするのは、出来事が未来に属するか否かではない。むしろ、話し手にとって当該事態を確定的に述べるのが困難であるという点に焦点がある。すなわち、本節で扱うのは、予測の不確実性や情報の不十分さに起因する断定不可能性であり、時間的な前後関係そのものを問題とするものではない。その上で、本節では、B & L の理論のみでは十分に説明できない、概数表現の使用による発話責任の抑制について、Grice の質の格率に関する知見を援用し、その説明を試みる。以下に示す (13) は、職員室において同僚と修学旅行の下見に関する具体的な行程や訪問先を検討している会話である。

(13) T020_003 【職員室で同僚と修学旅行の下見について相談】

IC01: 相手との打ちは大体1時間ぐらいで終わるから、平和記念資料館見学には合流。

IC03: うんうん。

(一部修正、CEJC (会話 ID : T020_003、開始位置 : 6470)⁸)

⁷ Grice (1975) は Grice (1989) という論文集に再録されている。本論では Grice (1989) を参考している。

⁸ 本稿では、CEJC を『日本語日常会話コーパス』の略称として用いる。以下も同様である。

(13) の「大体1時間ぐらい」という概数表現は、「大体」と「ぐらい」が同時に「1時間」を修飾しているという解釈ができる。「大体」は時間の長さを曖昧にし、時間の長さの解釈に柔軟性を持たせる機能を果たし、聞き手に厳密な時間制約を課さないようにできる。一方で、「ぐらい」も同様に概数化の機能を担っており、つまり、「だいたい～ぐらい」という曖昧な表現を併用することで、「予定通りに終わらない」という含みを持たせている。すなわち、打ち合わせの所要時間はあくまで予定であり、実際の議論の展開によって短縮あるいは延長される可能性がある。この点から、話し手が概数表現を用いることで、自らの発話に対する責任を抑制していると考えられる。したがって、「大体1時間ぐらい」という概数表現は、話し手が自身の発話内容に柔軟性を持たせることで、より円滑なコミュニケーションを促進するための言語的手段として機能しているのである。

さらに、話し手が「1時間」という具体的な時間表現ではなく、「大体1時間ぐらい」といった概数表現を用いた場合であっても、聞き手は「大体～ぐらい」という表現が指し示す時間的範囲（数値的範囲）について、妥当な解釈を行うことが可能である。このことから、話し手は意図的に時間情報を概略化して提示しているとも考えられる。「意図的に概数化しているのであれば、粗略性を戦略的に利用していることになる」と加藤（2022：38）で述べている。

まとめて言うと、Griceの協調の原理に基づけば、具体的な「1時間」よりも、概数表現である「大体1時間ぐらい」のほうが、聞き手にとって受け入れやすく、話し手にとって責任を回避することができると考えられる。その理由は、両者が指し示す時間の範囲が異なるためである。話し手は、聞き手に信頼されるために、誤って「1時間」と断定するよりも、「大体1時間」あるいは「1時間ぐらい」といった曖昧な表現を用いる傾向にある。同時に、「大体1時間ぐらい」という概数表現を用いれば、質の格率への違反と見なされることを回避することができる。言い換えれば、話し手は自らの発話に対して責任を負いつつ、会話を遂行していると解釈することができる。

一方で、「大体」はモダリティ副詞としても使われることが多い。この用法では、「大体」は、「大体1時間」といった概数表現の一部として解釈されるのではなく、「大体（1時間ぐらいで終わる）」のように、発話全体、すなわち命題全体を修飾する形として理解される可能性がある。そうすると、「大体」は単に数値をおおよそにする概数化の機能を果たしているのではなく、話し手の判断や確信の度合いを示すことで、命題自体に曖昧さや不確実性を付加していると考えられる⁹。

また、(14) に示すような飲食業の場面においては、概数表現が頻繁に用いられていることが確認できる。時間帯によって店内の混雑状況は、店員のこれまでの経験からある程度予測可能であるものの、具体的な待ち時間を正確に提示することは困難であろう。このような状況において、対応する店員は概数表現を用いることで、顧客に対して一定の解釈の幅を許容しつつ（聞き手の解釈の自由度が上がっている）、自己の発話に対する責任を軽減していると考えられる。

(14) 【レストランで】

客： すみません、後どのぐらい待ちますか？

⁹ 実際、「大体」という表現は、数量を概数化する用法や、モダリティを示す副詞的用法に加え、日常会話においては (i) (ii) のように談話標識としても頻繁に用いられている。

(i) 大体ね、もう4月になったのに、キャンパスの雪はまだ溶けていない。

(ii) 大体、あなたは一体何を考えているの？

店員：申し訳ございません、ただいま大変混み合っておりまして、お待ち時間は約1時間ほどを見ていただければと思います。

さらに、(15)は医療現場において日常的に耳にする会話例である。未来に関する事象は確定的に述べにくいため、話し手は発話内容に一定の責任を負う立場に置かれる。所要時間を厳密に提示すると命題の成立可能性が下がり、話し手に求められる責任水準が高まってしまう。そこで話し手は、所要期間を概数表現で示し、発話に伴う責任の帰属を緩和する手段として概数表現は、話し手が発話内容に対する責任を回避または軽減する機能を果たしていると考えられる。

(15) 【病院で】

患者：先生、完全に治るまでどのぐらいかかりますか。

医者：そうですね…。症状の程度や体の回復力にもよりますが、だいたい2週間から1ヶ月くらいを見ておいてください。ただし、無理をせずにきちんと休養を取ることが大切です。

発話内容を確定的に述べるのが困難であるという点において、本節で扱う概数表現は、3.3および3.4で論じた事例と同様に、発話内容の正確性を一義的に保証しないことによって、誤りの可能性や責任の帰属を相対化する語用論的機能を持つと位置づけられる。

4. 2 既知の事情について

前節では、断定が困難である事柄に対する予測において、人間は常に把握しにくい状況にあるため、聞き手に情報を伝える際には、自身の発話責任を軽減することができる概数表現を用いる傾向があることを説明した。この傾向は、既に起こったこと、すなわち既知の事実について語る際にも、一部が見られる。例えば、(16)は、花子と太郎が苺狩りに参加した後の日常的な雑談における発話例である。

(16) 【苺狩りに行ってきた】

花子：ねえ、昨日の苺狩り楽しかったね！

太郎：うん、すごく甘かったし、たくさん食べちゃったよ。

花子：私、たぶん30個ぐらい食べたかも。

太郎：えっ、そんなに？ 僕は20個ぐらいかな。

この会話において注目すべきは、両者が苺の個数について「～個ぐらい」と概数表現を用いている点である。苺狩りの際、苺の個数を正確に数える人もいれば、そうでない人もいる。仮に数えていなかった場合、聞かれたときに「分からない」や「大体30個」といった曖昧な表現で答えるのは自然である。たとえ数えていた場合でも、「32個」などの具体的な数値を示すより、「35個ぐらい」や「大体40個」といった柔らかい概数表現を選ぶ人が多いと推察される。これは、細部の記憶に対する自信のなさや、数値の誤りによる誤解を避けたいという心理が影響していると考えられる。すなわち、このような状況では、概数表現を用いて断定を避けることで、話し手が自らの発話に対する責任を軽減しようとする動機が働いている。「30個ぐらい」や「20個ぐらい」という表現は、数個の幅を含意しており、正確さよりも印象的な情報伝達を優先している。こうした発話は、断定を避けることによって、聞き手からの批判や異議を招くリスクを低減

させている。

さらに興味深いのは、話し手が実際には具体的な情報を把握しているにもかかわらず、意図的に概数表現を用いる場面である。(17) の例がそれに該当する。

(17) 【大学で】

山本：昨日めっちゃ本を買っちゃった！

鈴木：は！？ いくらしたの？

山本：全部で 1万8千円 ぐらいかな。古本が多かったから、思ったより安く済んだ。

この会話では、山本が支払った金額について、「1万8千円ぐらい」と発話している。金額は昨日のものであり、レシートなどの記録があれば正確な数値も知り得ると考えられるが、あえて概数化した表現が選ばれている。このような意図的な曖昧化は、Grice (1975) の協調の原理、特に「質の格率（真実を述べよ）」に対して、一見すると違反にあたるようにも見える。しかし、日常生活ではこのような使用が頻繁に見られ、むしろ円滑なコミュニケーションを成立させるための有効な手段となっている。

加藤 (2011: 94) は、語用論的信頼性に関して2つの原則を提示している。第一に、「話し手は、解釈が可能で、かつ、妥当な解釈が存在する発話を行うと、聞き手は信頼している」とする【語用論的信頼性の第一原則】である。第二に、「聞き手は、世界知識と推論能力を利用して、発話を適切に解釈すると、話し手は信頼している」とする【語用論的信頼性の第二原則】である。これらの原則に基づけば、話し手が「1万8千円ぐらい」と述べた場合でも、聞き手はその発話を合理的に解釈し、会話は問題なく成立する。つまり、話し手が正確な情報を提示していないとしても、それは誤情報の提供ではなく、コミュニケーション上の適切な柔軟性として認識されるのである。要するに、根拠あるいは情報が不十分であっても、責任を持たずに発話しているとは言えない。逆に言えば、話し手と聞き手の互いに信頼性を持っているからこそ、概数表現を用いて不要あるいは細かい情報を省略している。

このように、既知の事実に対しても、話し手は自らの発話責任を軽減し、聞き手との対人関係の円滑性を保つために概数表現を用いることがある。これは一種のネガティブ・ポライトネスの間接的な実現と捉えることができるが、その目的は必ずしも聞き手の行動の自由を尊重することではなく、むしろ話し手自身の発話の自由や、正確さに対する社会的圧力からの解放を志向していると考えられる。結果として、概数表現は、発話の正確性と責任のバランスを調整するための、きわめて実践的かつ柔軟な表現形式であると位置づけられる。

5. 認知処理と概数表現の関連性

これまで概数表現の使用にはポライトネスや発話責任の軽減といった機能があることを論じてきたが、本節では、B & L や Grice の理論では説明しきれない「認知処理」の観点から、話し手および聞き手が概数表現を通じてどのように認知的負荷を軽減しているかについて考察する。われわれの言語生活においては、金額を計算する場面が多く見られる。例えば、買い物をする際に商品の合計金額を計算したり、割り勘をする際に1人当たりの金額を算出したりすることは日常的に行われている。その1例として (18) が挙げられる。

(18) 【スーパーでの買い物】

A：えっと、お菓子がだいたい1,500円で、飲み物が1,200円ぐらい。あと、カップラー

メンが3つで 900 円 ぐらいかな。
 B: それでざっくり 3,600 円 ぐらいね。ほかに何か買う？

(18) は、これからの買い物に関する計算を行う場面を想定しやすい。まだ実施されていない未来の行動であるため、具体的な金額を算出することは困難である。ただし、インターネットなどを利用して各商品の価格を調査し、計算することは可能であるものの、購入予定のすべての商品を調べるには一定の時間を要し、非効率的である。このような場合、おおよその金額を用いるのが一般的であろう。一方で、未来の支出に関して具体的な金額を明示すると、話し手は自身の発話内容に対して一定の責任を負う必要が生じる。しかし、前述のように、B & L のポライトネス理論では、発話の曖昧化による話し手の責任の軽減については言及されていない。また、金額の計算などには話し手および聞き手の認知的な処理も関与すると考えられるが、B & L や Grice はこの点にも触れていない。そこで、本節では、認知処理の観点から話し手および聞き手にかかる負担を見る。

(19) は、居酒屋における大学の同級生が割り勘する様子を示している。この場面では、和やかな雰囲気の中での自然な会話が展開されている。会話の中では、「4,400 円ぐらい」「大体 4,500 円」「4,500 円ぐらい」という 3 つの概数表現が使用されている。

(19) 【居酒屋での食事が終わり、店員が伝票を持ってくる】

店員：お会計、17,658 円になります。

A： はい、ありがとうございます。

B： えーと、4 人で割ると…一人 4,400 円 ぐらいだね。

C： もう、大体 4,500 円 でいいんじゃない？ 誤差ってことで。

D： じゃあ、俺がカードでまとめて払うから、それぞれ 4,500 円 ぐらい送ってくれば大丈夫だよ。

A： 了解！ じゃあ、私 PayPay で 4,500 円送るね。

前述の議論に基づくと、「大体」「約」「ぐらい」といった概数化表現は、断定的な表現を避けることで、数値の解釈に曖昧さを持たせ、聞き手に異論を挟む余地を残す働きを有していると示唆される。すなわち、聞き手が「いや、それは違う」と感じた場合でも、概数表現の介在により、対立を回避しやすくなると考えられる。また、上記 (19) の会話場面は、割り勘に関するものであり、実際に発生した支出の正確な金額が把握しやすい。しかし、それでもあえて概数表現が用いられている。その理由の 1 つとして、概数表現の使用は発話者にとって責任回避の手段ともなり得る。例えば、聞き手から「正確には 4,414 円 (50 銭) じゃない？」と問われた場合でも、「大体だからね」と答えることができるため、発話内容の正確性 (正確な数値) に対する責任を免れることが可能となる。実は、このような概数表現の使用は、単に発話者の責任を軽減することにとどまらず、聞き手にとっても認知的な負担の軽減につながり、円滑なコミュニケーションを促進できると考えられる。加藤 (2022: 38) も、「私たちは、「32058794」という金額を「3 千万円あまり」「3 千 2 百万円ちょっと」などと概数化して言うことがある。個人差はあるが、細かな金額を正確に記憶しておくことが認知上の負担になることはあり、(…省略)、「3 千万円あまり」といった概数なら負担にならず、記憶上も保持しやすい」と指摘している。

この観点から、(19) の会話の内容を見ると、例えば、「4 人で割ると…一人 4,414.5 円だね」と具体的な数値を提示した場合、聞き手はその数値を正確に記憶・処理する必要が生じる。特に

細かな数値が提示された際、聞き手は一時的に情報を保持しながら理解しなければならず、記憶的負担が増大する可能性がある。これに対し、「一人 4,400 円 ぐらいだね」といった概数表現を用いることで、聞き手は数値を厳密に記憶する必要がなくなり、おおまかな理解で十分となるため、認知的処理の負担が軽減される。加藤（2022：37）で述べているように、「厳密で細かい情報は記憶の負担にもなるので、情報を概略化することにより、情報を保持しやすくする」といったプラス面が確認することができる。加えて、本稿ではこのような利点が聞き手のみならず、話し手にとっても重要な利点があることを指摘しておきたい。

例えば、聞き手が「3,875 円」や「1,968 円」といった細かな数値が提示された場合、聞き手は一時的に情報を保持しつつ、同時にその意味を理解し、状況に適した判断を下す必要がある。これは記憶のみならず、計算処理の側面でも認知的な負担を伴う。計算するにあたり、精緻な数値に基づく計算には正確性が求められ、聞き手にとっては高い認知的負担がかかる。一方で、話し手にとっても、聞き手に情報を提供するためには正確な数値を記憶し、それを正確に言語化する必要があるため、発話処理における負担が増大する。

しかしながら、概数表現を用いることで、記憶および計算処理にかかる認知的負担を軽減することが可能となる。例えば、「 $1896 + 2986 + 4876 = 9758$ 」といった正確な計算を行うよりも、それぞれをおおよその数値として「約 2000 + 約 3000 + 約 5000 = 約 10000」と概算することで、計算に要する時間や労力が少なくなると考えられる。すなわち、概数表現を使用することによって、計算がより容易になる可能性がある。

このような概数表現の利点は、聞き手にとっては、厳密な数値の記憶・正確な計算を求められないため、認知的負担の軽減、すなわち認知処理における経済性が得られる。一方で、話し手にとっても、細かな数値を正確に記憶し、それを正確に言語化する必要がなくなり、発話負担が軽減されるため、発話処理における経済性¹⁰が向上すると考えられる¹¹。

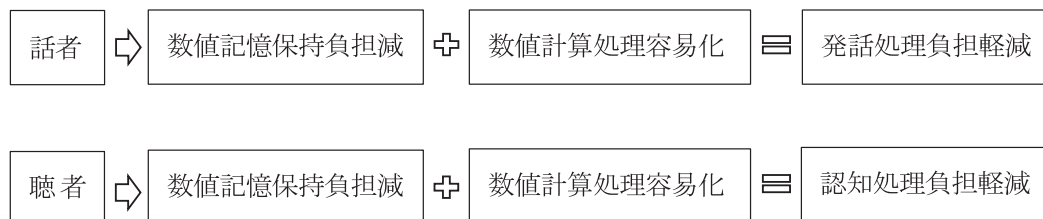


図1 話者と聴者の負担プロセス

図1は、概数表現が用いられる際に関与しうる語用論的・認知的要因を模式的に示したものである。ここで示した処理のうち、談話記憶の保持は、日常会話において不可欠な要素であるのに

¹⁰ 言語学的観点から見ると、具体的な数値である「2000 円」に比較し、概数表現である「大体 2000 円」あるいは「2000 円ぐらい」は、モーラ数が多く、発話における語の数も増加する。したがって、文字数の少なさという点においては、これらの概数表現は経済的であるとはいいがたい。しかし、本稿では、モーラ数や単語数の増加といった形式的な発話の長さ自体を主たる論点としないため、議論の対象外とする。

¹¹ 記憶情報の抽出（abstraction）について、加藤（2020）で詳しく述べているため、参照されたい。

対し、数量に関する計算処理は、必ずしもすべての発話において必要とされるわけではない。日常的な会話場面では、厳密な計算を行わずとも、概数表現を通じて十分な理解が達成される場合が多い。本図は、こうした処理が文脈に応じて関与しうる可能性を示すものであり、各要因の重要性や必然性が常に等しいことを示すものではない。

6. おわりに

本論では、「大体1時間」「約300人」「30個ぐらい」などの概数表現が果たす語用論的機能について、B & L (1987) のポライトネス理論および Grice (1975) の質の格率を理論的枠組みとして援用し、話し手の発話責任の調整ならびに聞き手に対するネガティブ・ポライトネスの機能を分析した。

まず、行為要求や行為予告の場面においては、概数表現が聞き手あるいは話し手自身のネガティブ・フェイスを保護するものとして機能し、発話内容を曖昧にすることで相手や自己の行動の自由度を上げようとする意図が確認された。次に、未来の出来事に対する予測や、過去の事実の叙述においては、ネガティブ・ポライトネスとしての機能が弱く、明確にならないが、話し手が責任を相対化し、断定的な表現を避ける手段として概数表現を用いる傾向が見られた。これらの用法は、質の格率に照らすと、話し手が不確実な情報に基づく発言の責任を軽減するための語用論的戦略であると解釈できる。

また、認知処理の観点からは、概数表現が話し手・聞き手双方にとって発話の負担や認知処理の負担を軽減し、円滑なコミュニケーションを促進する役割を果たしていることが確認された。とくに、数値情報を厳密に提示する場面においては、概数化によって発話内容の記憶や理解、計算の容易化がもたらされるという点において、言語的経済性（発話上の経済性および認知処理上の経済性）の側面も有している。

以上の考察を踏まえると、日本語における概数表現は、単なる数量の曖昧化にとどまらず、発話責任の調整や認知的負荷の軽減といった複数の機能を併せ持っている結論づけることができる。

今後の課題としては、概数表現が異なる文化的背景や言語的状況においてどのように使用されるのか、また人間がそれをどのような意図や目的のもとで用いるのかを検討する必要がある。その上でその機能が文化的要因によってどのように変化するのかを明らかにすることである。加えて、話し手と聞き手との社会的関係性が概数表現の使用にどのような影響を与えるのかについても、より多くの実証的データに基づく分析が求められる。

参考文献

- 赤楚治之 (2005) 「日本語における概数数量詞の Q-float について」『日本語文法』第5巻2号、pp.57-73.
 加藤重広 (2009) 「動的文脈論再考」『北海道大学大学院文学研究科紀要』第128号、pp.195-223.
 加藤重広 (2011) 「世界知識と解釈的文脈の理論：ネオ・グライス語用論の再構築」『北海道大学文学研究科紀要』第134号、pp.69-96.
 加藤重広 (2020) 「心理的文脈と前提に関する動語用論的研究」田中廣明、秦かおり、吉田悦子、山口征孝 (編) 『動語用論の構築へ向けて 第2巻』、pp.242-266.
 加藤重広 (2022) 「粗略性と過剰性—日本語における語用論的戦略—」『待遇コミュニケーション研究』第19巻、pp.35-50.
 呉慶霞 (2022) 「概数量表示の接辞と認知における数量の非均質性・非対称性—中国語との比較にも言及

- しつ一つ」早稲田大学国文学会『国文学研究』第197号、pp.83-69.
- 田中秀毅（2011）「日本語における概数詞の遊離文について」『日本語文法』第11巻1号、pp.139-156.
- 張琴琴（2024）「現代日本語における数量詞の分類について」『北海道大学大学院文学院研究論集』第23号、pp.283-302.
- 仁田義雄（1981）「数量に関する取り立て表現をめぐる一系列と統合からの文法記述の試み」『島田勇雄先生古希記念ことばの論文集』、pp.191-214.
- 仁田義雄（2002）「副詞的表現の諸相（新日本語文法選書3）」くろしお出版.
- 森山卓郎（2001）「近似値表示の連体詞と副詞」『国語学研究』第40号、pp.114-104.
- 森山卓郎（2022）「『六、七万円』：六、七万円って、要するにいくら？」森山卓郎（編）『あいまい・ほんやり語辞典』東京堂出版.
- Grice, H. Paul (1975) "Logic and Conversation", *Syntax and Semantics 3 Speech Acts* (ed.) Cole Morgan, New York: Academic Press, 41-58.
- Grice, H. Paul (1989) *Studies in the way of words*, Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Lakoff, George (1972) "Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts." *Chicago Linguistic Society Papers*, 8, pp.183-228.
- Penelope Brown and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (ベネロピ・ブラウン、スティーヴン・C・レヴィンソン (著)、田中典子監訳 (2011)『ポライトネス言語使用における、ある普遍現象』研究社).

例文の出典

日本国語研究所『日本語日常会話コーパス (CEJC)』：<https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2026年1月18日最終閲覧)

【付記】

本稿は、2025年日本語教育および日本語学研究国際シンポジウム（於：中国・華東理工大学）における口頭発表の内容を加筆修正したものです。発表の席上でご助言を賜りました先生方に御礼申し上げます。そして、指導教員の加藤重広先生および査読を担当して下さった匿名の2名の先生方からは大変貴重なコメントをいただきました。ここに記して感謝いたします。本稿における瑕疵は全て著者の責任です。なお、本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2119の支援を受けたものです。

（チョウ キンキン・北海道大学言語科学研究室・博士後期課程）